

日本中國學會報 第70集
2018年10月6日 発行 抜刷

学界展望 (哲学)

三浦 秀一
佐藤 信弥
齋藤 智寛
南部 英彦
高野 淳一
尾崎 順一郎

学界展望

●哲学

はじめに

本集の学界展望（哲学）は東北大学文学研究科中国思想研究室（代表：三浦秀一）が文責を負う。執筆は下記各氏の分担、2017年刊行の著書・論文をその対象とする。はじめにと総記・近世・日本漢学の一部が三浦、出土文字資料が佐藤信弥（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所）、古代中世が齋藤智寛（一部、岩手県立大学盛岡短期大学部高野淳一・山口大学南部英彦）、日本漢学が尾崎順一郎である。なお近代は割愛し、各時代地域の道教関連論著は三浦の論評による。昨年の理事会で承認されたとおり、学会HPへの著書・論文リストの掲載（2004年開始、2008/9年は不掲載）は本年からおこなわない。作業の過程で作成したリスト（稿）は本研究室のHPに公開する予定である。旧来の分類におおむね準拠するそのリストの準備は、研究室の大学院生である劉曉春・豊島ゆう子・孫翔宇・宗延聡・川端征輝・相原貴次各氏に依頼し、整理の段階では中国近代思想について朱琳（東北大学国際文化研究科）、日本漢学について片岡龍（同文学研究科）両氏の助言を得た。

展望の執筆にあたり想起されるのは、池田秀三氏による本欄所掲の見解（『日中學會報』62）と川合康氏によるそれへの応答（『日本中国学会便り』2010-2）である。わたし個人は、池田氏のような潔い覚悟も、川合氏が求められた気概やしなやかさも持ちあわせず、池田氏が第63集本欄において実証的に解説された論著分類の困難さの前に右顧左眄するよりすべがないのだが、上記争論の読者として以下の如き見解を示し、両氏をはじめ大方の叱正を仰ぎたい。

一、総記

総記では考察内容がひとつの時代に限定しにくい著書と関連の論文を扱う。まず通時的共同研究。藤井淳編『古典解釈の東アジア的展開—宗教文献を中心として』（京大人文研。以下『古』と略記）はこの書名と同名の研究班の成果。表題に言う「展開」を通時的にかつ他地域と対比的に検討することがその趣旨だが、十二篇の所収論文中、編者自身「最も研究班の主旨に沿った研究の一つ」と評価するのが中国プロパーの研究ではなく、中西竜也「ディーンが「教」になるとき—前近代の中国ムスリムにおける「宗教」と「共同体」である点、共同研究の将来を考える上で示唆的。同論文は、前近代の中国ムスリムがディーンを「教門」と訳す一方、ラシードウッディーンの『集史』以下では儒教をディーンに含めなかった点から議論を始める。関大東アジア宗教儀礼研究班の成果である原田正俊編『宗教と儀礼の東アジア—交錯する儒教・仏教・道教』（『アジア遊学』206、勉誠出版）も、上記報告書と同様の趣旨。東アジア諸宗教間の儀礼における歴史的交錯状況の解明を目的とする。佳篇の多い日本学研究は割愛し、中国関連

の論致で本書の趣旨にそうものを一点のみ挙げれば、唐代においてより顕著になる儒仏道三教融合傾向について、漢訳仏典や敦煌発見の「書儀」を活用し伝統的葬送儀礼の歴史の変容をあとづける荒見泰史「中国仏教と祖先祭祀」。『アジア遊学』は『ひと・もの・知の往来』(208)において日本の学芸に揺曳する西域や天竺の影に言及し、『魏晋南北朝史のいま』(213)には史学分野のすぐれた研究を載せる。

次に通史。小島毅『儒教の歴史』(山川出版社)は、「教訓」と「教説」その双方の「教」の意味を含む「儒教」の歴史的展開を全体的に描くべく、思想哲学的側面にとどまらず実際の儀礼や慣習へのその作用に踏み込む。著者各方面の専著の集成でもあり、中国以外の地域に視野を拡げ礼制関連の経説への分析に意を払う点で、本書の実質的旧版である『儒教史』(山川出版社1987)とは相貌を異にする。礼制研究としては、吾妻重二編著『家礼文献集成』日本篇(関大出版部)の継続刊行があり、同「日本近世における儒教葬祭儀礼」(『アジア遊学』206)が、朱熹『家礼』の日本的展開に関する氏の研究の一環として葬礼をめぐる江戸儒者の著作活動や使命感を具体的に明かす。

礼制に関する日本人研究者の関心と対比させたいのが、ピュエットの礼論である。中島隆博「マイケル・ピュエット—中国哲学の現在地」(『中国—社会と文化』32)は、『ハーバードの人生が変わる東洋哲学』(原題 *The Path* 熊谷淳子訳、早川書房2016)の著者による研究をその学問的背景とともに紹介する。ピュエットは、転変きわまりなき世界においてよりましな人間関係を築くべく、あるべき儀礼を「かのように(as if)」実践するなか弱い規範を継続的に創造することを求め、礼にその規範性を見出す。マイケル・ピュエット(水野博太訳)「礼による分離—鬼・哲学・人類学」(『中国—社会と文化』32)も参照。第八回日中學者中国古代史論壇の成果である渡邊義浩編『中国史学の方法論』(汲古書院)は、戦前から近年までの諸研究を方法論批判の観点から再検討する。その範囲は文学や史学にもわたり、中国大陸の学者による現時点での見解も載る。

書誌学・目録学関連の論著もここで紹介したい。榎本淳一「中日書目比較考—『隋書』経籍志の書籍情報を巡って」(『東洋史研究』76-1)、水上雅晴「年号勘文資料が漢籍校勘に関して持つ価値と限界—経書の校勘を中心とする考察」(『中大・文学部紀要』267・哲学59)、井上進「台北所見明版書選録(集部)」(『東洋史研究報告』41)、永富青地「尊経閣文庫所蔵の明版『聖朝破邪集』について」(『汲古』71)といった労作のほか、古勝隆一「目録学」、宇佐美文理「子部の分類について」、永田知之「目録学の総決算」よりなる京大人文研附属東アジア人文情報学研究センター編『目録学に親しむ—漢籍を知る手引き』(研文出版)がある。史部という分類概念の確立以前、史書との認識を抱かずに編まれた書物が、その後、史部に分類された場合の評価と事実との乖離を指摘する永田拓治「史部の成立」(『アジア遊学』213)の視点も参考になる。

二、出土文字資料

中国古代史研究会編『中国古代史研究第八—創立七十周年記念論文集』(研文出版)は、秦代の県府での治獄を概観した池田雄一「里耶秦簡の治獄について」、占術書に属する「堪輿」を扱う名和敏光「出土資料「堪輿」考」など各分野の出土文字資料に拠つ

た論考を収録する。末次信行「殷王朝の集権機能—武丁期を中心に」は、殷代甲骨卜辞は王と臣下との間の盟書の役割を果たすものとして誕生したという議論を軸に、占卜という行為や卜辞に現れる「帝」信仰の政治性を検討し、卜辞を甲骨に刻むという行為の特殊性に注目する。

松丸道雄『甲骨文の話』（大修館書店）は同氏の甲骨学に関する旧稿・講演録を中心にまとめたもの。「漢字起源問題の新展開—山東省鄒平県出土の「丁公陶片」をめぐって」では、漢字が先行する新石器時代文化の文字文化の刺戟によって創造された後発の文字であったという仮説を提起する。漢字の起源問題は新しい発見を待ちつつ既存の資料によって考察が深められている。「『甲骨文』における「書体」とは何か」は、甲骨文を書契したのは貞人とは別の契刻者集団であり、全甲骨を書体のみにもとづいて分類・編年する作業が必要だと説く。中国・台湾でも同様の発想にもとづき甲骨文の分類研究が進められている。鈴木舞『殷代青銅器の生産体制—青銅器と銘文の製作からみる工房分業』（六一書房）は、殷金文の字体の分類から青銅器生産の中の施銘の工程のあり方について検討する。

湯浅邦弘編『清華簡研究』（汲古書院）は、清華簡『殷高宗問於三寿』が天人相関思想を基調としていることなどを指摘した湯浅氏の論文をはじめ、主に清華簡の各文献の釈読と思想史の観点からの研究を収録する。福田哲之「清華簡（壹）～（陸）の字迹分類」ほか二篇は書体（氏は「字迹」語を使用）や用字を問題にしたものであり、清華簡の各文献を字迹に基づいて三類に大別。竹田健二「『楚居』の劃線・墨線と竹簡の配列」などが、竹簡の背面の劃線と竹簡の配列との対応について検討するとおり、書体や竹簡の形制に関する論考も併録することで、同書は清華簡に関する総合的な研究となった。

出土文字資料を扱う上で問題となるのが、盗掘品の扱いや偽造品の流通である。石原遼平「中国簡牘学の現在」（『歴史学研究』964）は、簡牘の整理や保存の問題とともに盗掘簡・偽造簡の流通の事情にも触れる。同誌掲載の座談会「出土文字資料が拓く歴史研究の可能性」参照。宮宅潔「嶽麓書院所蔵簡「亡律」解題」（『東方学報京都』92）は、「本物の盗掘品」と判断された嶽麓書院所蔵簡を史料として扱う問題点や苦衷をまとめる。小沢賢二「文字学からみた浙江大『左伝』偽簡説の問題点」（『汲古』71）は、一般に偽造簡であるとされる浙江大学蔵戦国楚簡『左伝』について、用字や書体など文字学上の観点から偽簡説に批判を加え、これを真正簡であるとし、大西克也「浙江大学蔵竹簡『左伝』は研究資料たり得るか」（『汲古』72）は、その批判の対象となった大西氏による反論。

清華大学蔵戦国竹簡『繫年』は先秦史の史料として注目され、関連の研究が多く発表されたが、一方で史料としての限界性に留意した研究も存在する。水野卓「清華簡『繫年』が記す東遷期の年代」（『日本秦漢史研究』18）は、周の東遷の年代について、『繫年』によって従来の前770年説に対して前760年説を提示するが、これは『繫年』の記録者ないしは編纂者の想定した年代・認識だという前提に立つ。吉本道雅「周室東遷再考」（『京大文学部研究紀要』56）も同じ前提に拠りつつ、同氏の旧説の前738年説を再

検討する。西山尚志「疑古と積古」(『中国史学の方法論』)は、出土文字資料を使用する研究で基礎理論とされてきた王国維の「二重証拠法」を、反証可能性を拒否・放棄するなどの論理的欠陥があり、史料批判を封じる役割を担ってきたと批判する。

出土文字資料の研究に関しては、今後も本欄で取り上げたような基礎的な問題に対する議論が深められることが期待される。

三、古代中世

出土資料についての基礎研究は、伝世文献との相互参照による思想史研究へと展開させられるべきであろう。福田哲之「『尹誥』の思想史的意義」(『清華簡研究』)は、『尹誥』と『孟子』の思想的類似および『尚書』との関係を論じ、横山慎悟「楚簡文献に見える忠臣像について—君臣説話における献身と直言」(『九大・中国哲学論集』43)は、楚簡資料の君臣関係説話を分類整理し儒家・墨家思想との関連を考察する。額川智「通行本『老子』の「道」に見られる矛盾」(同前)は、簡帛諸本を踏まえた通行本『老子』の読み直し。

漢代思想史では、経書・緯書や経学についての精緻な成果に注目したい。黒崎恵輔「『礼記』燕義篇の成篇過程と「義」の役割」(『東洋の思想と宗教』34)は、三礼の文を錯綜させつつ礼の理念を説明する『礼記』燕義篇の成立を論じる。末永高康「前漢廟制論議と『礼記』祭法篇」(『東洋史研究』76-3)は『礼記』諸篇に記された廟制の多様さに留意しつつ、前漢の廟制論議に骨格を与えたのは祭法篇であることを指摘し、出土資料を手がかりに祭法篇の成立時期を推定する。本年の研究動向・方法を総合した雄篇である。氏には「玄酒小考」(『東洋古典学研究』43)もある。早川泉「飛伏説からみる『京氏易伝』の八宮構造」(『中国哲学研究』29)は、『京氏易伝』の飛伏説について従来説を批判的に検討し、十二消息的な卦変と、八卦重卦による卦変という二通りの考え方が『京氏易伝』にはあると論じる。藤田衛「『易緯』八種の真偽問題について」(『東洋古典学研究』43)は、書目の記載、本文内容、後世の引用などに注目して『易緯』の真偽を考察し、同「『易緯』爻辰説の考察」(『日中学会報』69)、「『易稽覧図』に見えたる卦気説—京氏易との関連をめぐって」(『東洋古典学研究』44)は、資料問題の考察結果も踏まえ易緯と京氏易の異同を考察する。武帝期の学術について、福井重雅「『塩鉄論』と『穀梁伝』」(『東洋研究』205)は、『穀梁伝』がこの時期には成書し秘府に蔵されていたと論じ、鈴木達明「新しい聖人の書を目指して—学術の転換期における『淮南子』」(『中国文学報』89)は、道家から儒家への学術の転換を『淮南子』に見える言語観・書物観の動揺に見出す。

岩本憲司「『義』から「事」へ—春秋学小史」(汲古書院)は、漢代春秋学に関する著者の主要旧稿を発表順に並べた論文集。『春秋学用語集』補遺も収録。津田左右吉以来の、春秋の解釈法の変遷を「義」(公羊・穀梁)から「事」(左氏)へと捉える見方にもとづき、漢代春秋学の展開の諸相を解明する。『左氏伝』を、前漢成帝期に劉向・劉歆父子が、中秘書の領校作業中に新たに発見した史話・説話集を春秋の「伝」と認定して整理・編集を加え、漢王朝に向けて提出した書物とする創見は、前漢末における古文学

者の活動の実態を追究した点で貴重である。(岩本著の論評は南部英彦担当)

科学史や自然哲学、術数について、有馬卓也「呪術系予防医療の一端—『淮南万畢術』解析試論」(『東方宗教』130)は、『淮南万畢術』から「驚」の予防医療と見なされる条を見きわめる。姜生(三浦國雄訳)『道教と科学技術』(東方書店)は姜生・湯偉俠主編『中国道教科学技術史漢魏兩晋卷』(科学出版社2002)に対する「7割方」の編訳。「序説」では、「科学」を西洋近代の限定的視点から解き放つ認識を提示する一方、その視野を唐宋以降の「重玄学」や全真教、内丹説にまで拡げ、当時の道教および中国の「科学技術」の内在化傾向を論じる。続く各論では「煉丹術と化学」、「医学と養生学」、「天文学と地理学」といった章題の如く狭義の science を構成する基本的分野につき、達意の日本語に訳された墨子、管子、呂氏春秋、淮南子、論衡などの子書を駆使して「科学技術」の多彩さを描き出す。壯観である。その「科学技術」がいかに関連するのかが問題だが、姜生(三浦國雄訳)「張道陵以前の儒生の道教」(『東方宗教』129)は、後漢末五斗米道以前の信仰体系をも「道教」と規定し、その内容を神仙方術と黄老道にまたがるものと見る。なお科研の報告書として、松下道信責任編集の任継愈主編『中国道教史』(増訂本、中国科学出版社2001)訳注稿(第二・四・五篇)もある。

上清派と靈宝派双方の活動内容や經典群の考察が六朝隋唐道教思想研究の中心的テーマであることは言を俟たない。神塚淑子『道教經典の形成と仏教』(名大出版会)は、『六朝道教思想の研究』(創文社1999)において上清派および太平道を分析した著者が、靈宝派系經典群の形成とその展開を、仏教思想ないし漢訳仏典との関わりを中心に文献の博搜と綿密な読解にもとづいて考察した重厚な一書。前著同様、道教造像・銘文を活用する分析も見られ、日本所蔵の敦煌写本の調査結果や、唐代における上清派の活動にも論及する。元始旧經および新經と大別される靈宝經典群それぞれの性格や内容、それに依拠する靈宝齋や元始天尊という神格が、仏典との対比のもと明確に示される過程において、その「固い核」としての「孝」の思想や「自然」ないし「氣」の概念という中国の伝統的思惟の存在が析出される。垣内智之「『上清大洞真經』の構成について」(『東方宗教』129)は、上清經の形成・整備の過程を解明してきた著者が、その經典群の最上位に位置する『大洞真經』の錯綜した成立事情を論じる。道藏本『上清大洞真經』の腑分けが、三十九の〈道經〉と各種神号との対応関係や時代判定の指標となる『無上秘要』の引用經典・敦煌資料との対照など緻密な手法によって遂行される。

和久希『六朝言語思想史研究』(汲古書院)は、「六朝時代の儒教が道仏あるいは老莊、文学といった文化的諸価値を積極的に含み込みながら、それらの複合体であり、かつ有機的な運動体として不定形に展開した、という思想史的な仮説を提起」し、当該時代の言語・文章とそれらの表わすものとの関係、ありかたに視点を据え、儒教、玄学、仏教、文学に幅広く目配りしながら論じる。提示した仮説に見合うだけの、当該時代の儒教観が纏まった形で考察されていない点、結論部分に物足りなさがあるものの、典拠を博搜してそれぞれの思想の拠って立つ根拠を詳細に明らかにし、資料の深い理解・読解を提示して、六朝時代の言語をめぐる思惟の諸相、その本質に迫る好著である。

(和久著の論評は高野淳一担当)

古勝隆一「魏晋期の儒教」(『アジア遊学』213)は、魏晋期の儒教を、後漢儒教を継承し次の時代へと橋渡しするものとして評価する。野間文史『春秋左伝正義訳注』第一冊(序・隠公・桓公篇)・第二冊(莊・閔・僖公篇)(明德出版社)は、詳細な訳注に加え、訳者作成の校訂文や、時に阮元の失校を正す校勘記を含む。近年刊行の訳注には作成意図の不明瞭な注釈も散見されるが、本訳注は専門的な議論から初学者向けの知識までを含みつつ、かつ必要十分なものが厳選されている。亀鑑としたい。

魏晋南北朝から隋唐への思想・学術の展開に触れた諸成果。渡邊義浩『『古典中国』における小説と儒教』(汲古書院)第一章から第四章までは『搜神記』を主題に、天人相関では説明できない怪異を解釈するという撰述理念や歴史観を論じ、初唐の仏教類書『法苑珠林』における『搜神記』の引用にも触れる。ただし『法苑珠林』が天人相関説に反駁するために引用史料を改竄しているとか、玄奘訳唯識説を用いているといった主張には、資料の提示と読解の双方に問題がある。同「顔之推の仏教信仰」(『東洋の思想と宗教』34)は、南北朝期における漢の「古典化」、隋を「仏教国家」とする理解など、論者独自の仮説を運用して『顔氏家訓』帰心篇を分析する。田中一輝『『顔氏家訓』における学問と保身』(『中国思想史研究』38)は、職分に応じた専門を守り、寒門の台頭を抑え自らの地位の下降を防ぐという顔之推の学問観を論じ、北朝士大夫一般に身分の固定化への志向があった可能性を示す。大島幸代「護法神信仰から見る南北朝時代中国仏教の一側面」(『アジア仏教美術論集 東アジア I (後漢・三国・南北朝)』中央公論美術出版)は護法神信仰の考察を踏まえ、排仏後の中国を神明が遍満した国へ復活させることが、隋に課せられた使命と捉えられたのであろうと予想する。

唐代思想研究は仏教が中心となる。高野淳一「初唐知識人の仏教理解—李師政の場合」(『岩手県立大盛岡短大研究論集』19)は、李師政『内徳論』三篇を読み解き、その三教観は当時の仏教に共通のものだが、通命篇や空有篇には独自の仏教理解も窺われることを指摘する。士大夫の仏教理解を論じる成果として貴重だが、同時代の思想状況や思想史的意義についての言及が簡略であり今後の課題とされる点が惜まれる。ウィックストローム・ダニエル「法蔵の著作撰述年代の再考」(『東方学』134)は、明確な方法論の下に法蔵の著作の撰述年代を再検討し、撰号に冠された寺号は年代特定の根拠となり得ないことを論証する。他の僧侶の著作研究にも見直しを迫る指摘である。石野幹昌「牛頭法融伝の再検討—思想的側面を中心に」(『名大・中国哲学論集』16)は、著者が牛頭法融の真作とする經典解釈書の佚文を集め、後世の『景德伝燈録』所収「博梁王問答」と比較検討する。坂内栄夫「『莊子』「庚桑楚篇」に見える老子・南榮**逖**問答をめぐって」(『古』)は、『莊子』庚桑楚篇に形式上類似する禪問答から中国的思惟の特質を考察する。『臨濟録』研究の現在—臨濟禪師1150年遠諱記念国際学会論文集(禪文化研究所)では荒牧典俊「臨濟禪師は何故に河北鎮州へ行かれたか」が、臨濟義玄の活動を、南北で速度の異なる唐宋変革という歴史的背景において北方征服王朝下の新しい価値の創造を促すものと論じる。古勝亮「戦後における『臨濟録』研究史」は、入矢義高、柳田聖山、井筒俊彦の研究を振り返り、今後期待される研究として、語学的に正確な読解と歴史考証に裏打ちされた解釈とのさらなる発展、日本の宗門における『臨濟録』解

釈の研究の二点を提言している。なお、賈晋華『古典禪研究』（上海人民出版社 2013）の全訳が齋藤智寛監訳・村田みお訳『古典禪研究—中唐より五代に至る禪宗の発展についての研究』（汲古書院）として刊行された。

偽経・偽論に関する基礎研究が相次いで刊行された。船山徹『東アジア仏教の生活規則 梵網経—最古の形と発展の歴史』（臨川書店）は、中国撰述經典『梵網経』下巻の最古形を復元し、本経の素材とされた先行經典および『梵網経』が影響を与えた偽経についても指摘する。「梵網」の語義や、仏性思想、教団運営の律への志向など、内容理解にも新知見が記される。大竹晋『大乘起信論成立問題の研究』（国書刊行会）は、『大乘起信論』の成立について、北朝の漢人が漢文仏教文献をパッチワーク的に編集したものであることを証明する。金剛大学仏教文化研究所編『敦煌写本『大乘起信論疏』の研究』（国書刊行会）は、従来「不知題論疏」とのみ報告されていた敦煌写本・羽 333 について、当該資料が現存最古の『大乘起信論』注釈書であることを突き止めた池田将則を中心とする共同研究の成果。佚名古逸注疏と高僧の注疏との関係への着眼は、仏教のみならず当該時期の学術を理解する上で重要である。これら偽経・偽論に関する三書をはじめ、上に紹介した中世仏教思想についての諸論考は世界に誇る成果である。だがその過半は非会員の業績であり、自戒を込めて、本学会員の奮起を望みたい。

思索を支える知覚作用や外界の把握の仕方はいかに考察され得るのか。前述した易や緯書、術数に関する成果もその回答のひとつであるが、またとくに味読したいのが、美術や詩を題材とした以下の諸篇である。栖山満照「漢代の立体人物像にみる具象と抽象—中国における仏像制作の前史として」（『アジア仏教美術論集 東アジア I』）は、仏像の様式ではなく、人物像を作り礼拝するという行為に論点を定めた仏像前史であり、文献の読みが繊細な好論。宇佐美文理「杜甫詩における視覚の問題」（『日中学会報』69）は、真実は視覚では捉えられないという観念がある中国思想における、杜甫にとつての視覚の意味を考察する。氏には「〔漁楽図〕の変遷について」（『古』）もある。

以上、古代中世で紹介した著作の一部は、東北大学文学研究科において齋藤が担当した講義の中で受講生と共にその内容を検討したものである。

四、近世（中国と周辺諸地域）

①中国（宋・元・明・清）

小島毅「中国近世儒教」（『日本儒教学会報』1）は、今世紀出版の中国近世思想関連研究書二十数点を概観し、将来への展望として下記三項目を挙げる。一、儒教の教説内容が、科挙制度やその担い手である士大夫の実生活とどう関わっていたかの実証的分析。二、宋学形成の途上における漢唐訓詁学からの継承と変容の展開過程。三、西学伝来にともなう中国学術の変容が持つ世界史的意義。これらの展望（以下、小島「展望」と略記）との距離感を意識しながら、「近世」に関わる論著を読んでゆきたい。

本題に入る前に研究の基礎作業ともいえる訳注の紹介から。文法的に妥当かつテキストの文脈にそって読むことが確かな文献読解の必要条件となる。思想研究に資する訳注に、中西久味『『大慧普覚禪師年譜』訳注稿 4』（『比較宗教思想研究』17）、水野実・阿

部光麿・大場一央・松野敏之「『論語私存』訳注10」（『論叢アジアの文化と思想』26）、吉田公平・小路口聡・早坂俊廣・鶴成久章・伊香賀隆「王畿「慈湖精舍会語」訳注1」（『白山中国学』23）、石井道子・永富青地「『新編天主実録』訳注1」（『人文社会科学研究』57）などがある。『朱子語類』の訳注も各誌で進行中。読解された文献から何をどう引き出すか、ここに研究者各自の力量とセンスがためされる。

まず小島「展望」の第二、いわゆる唐宋変革の実態解明に関わる研究から。加藤千恵「鉛汞小考」（『東方宗教』130）は、丹術の歴史は外丹から内丹へという単純な一方通行ではないことを証す。内丹理論が誕生した唐末頃、外丹を説く論法にも変化が見られ、しかも『周易参同契』に変革のための理論的根拠を見出すその点において内丹理論とも共通性を有すると説くのである。さて一昨年学会大会におけるパネルディスカッションにもとづく四篇の論文集松野敏之グループ「孝」の物語—中国近世・日本近世の事例（学会HP『研究集録』）だが、基調報告的役割をも担う松野敏之「唐宋における「孝感」物語」は、孝心が天地鬼神をも動かすことを記した唐代の寓話が、司馬光（家範）・程頤・朱熹（小学）では民衆への感化や心的態度への着目をうながす訓戒として解釈されると述べる。考察対象の限定性がパネルを方向づける。ただしその方向は注釈史の検証へと進み、青木洋司「南宋末における『論語集註』学而篇「孝弟也者、其為仁之本与」解釈」、原信太郎アレシヤンドレ「明代における『論語』学而篇「孝弟也者、其為仁之本与」章解釈—陽明学者を中心として」と続くのだが、一転して許家晟「花咲く「孝」—江戸初期をめぐる」は、『孝経』諸注、孝子物語、武士と民衆それぞれへの政策などを考察する。唐宋間の比較に限らないが、比較基盤の整合性を考慮する一方で、比較対象を選ぶ際の自由な視点も用意したい。

次に小島「展望」の第一、教説と実生活との関連性をめぐる実証的研究。研究者各自の方法論も関わる課題であり、文献上の限界ゆえに詰め切れないテーマも存する。つまりそう容易には具体化しえない展望ではあるが、その準備のためにも、政治、社会の諸問題から出版文化、個人の信仰生活などに至るまで関心の幅を拡げておきたい。以下、その関連から目を惹いた成果を数点挙げる。山本健太郎「祖宗の法」と宋代の国都」（『中国—社会と文化』32）は、南宋の駐蹕地である杭州の「祖宗の法」との関係性の上昇を説くなか、南宋末期成立の『咸淳臨安志』の序文が、『尚書』禹貢に対する北宋人士の解釈を前提に、禹が上陸した杭州を帝王正統の所在と捉えたことを指摘する。小川陽一『明清のおみくじと社会—関帝靈籤の全訳』（研文出版）は、靈籤流行の背景としての宗教史的文化的状況をも解明する。佐々木聡『復元白沢凶—古代中国の妖怪と辟邪文化』（白沢社）は、天文五行占書や怪異記録の発掘・分析を精力的におこなっている著者の真骨頂。坂出祥伸に紹介文がある（『東方宗教』130）。頼思好『新鑄仙媛紀事』の成立と明代女仙信仰」（同前）は、明末に出版された女仙伝の集成『新鑄仙媛紀事』をめぐる、編者楊爾曾の浄明道信仰や出版人としての側面、書物の内容やその時代性を論じる。

当該の展望を実現するためには従来の学説に対する再検討もまた必要であろう。その確かな土台の上に新たな知見を重ねたい。宋明両時代の関連する論著を幾つか紹介する。

林文孝「正統について」（伊東貴之編『治乱のヒストリアー—華夷・正統・勢』法大出版局）は、北宋正統論に関する西順蔵の考察を前提に、文献資料の時間的順序という西に欠けていた視点を補い、歐陽脩早年の見解→章望之の反論→蘇軾→司馬光→歐陽脩晩年の定論という順番で関連文献を精読、欧陽脩の定論における論理的・思想史的位置を確定させる。同「『仁と為す』か『仁を為す』か—朱熹『論語集注』のもとでの『論語』顔淵篇「克己復礼為仁」の訓読」（『立教比較文明学会紀要』17）も好論。梶田祥嗣「黄裳の周礼思想—王安石『周礼義』の継承を中心として」（『日中學會報』69）は、黄裳が王安石『周礼義』の序列構造を踏まえ『周礼』の制度論が説く官僚倫理を提示するかたちで王氏の経義を継承したことを述べる。福谷彬「陳亮の「事功思想」とその孟子解釈」（『集刊東洋学』116）は南宋「事功」派陳亮の著作を通覧し、『孟子』「好貨」条に依拠して理想を構築する陳亮の思想基盤および朱熹との論争を契機としたその思想的深化を論じる。

大場一央『心即理—王陽明前期思想の研究』（汲古書院）は、陽明が弟子たちとの対話に込めたかれの実感を氏自身の言葉でつかもうとする意欲作だが、氏に拠れば、陽明の「心即理」とは、個別状況に密着した倫理的意識に理あるいは本体をそのまま認めようとする思想的態度であり、心の自然を写し取るものにして、しかもこの心は儒教倫理を超えて儒仏道を包み込む可能性を持たない。かつて李贄と耿定向とは「已むを得ざる」本心としての「孝悌」をめぐる論争をおこなった。如上の「心即理」理解は耿氏のさらに「右」側に位置し、良知論の一展開とは言い得る。だが致良知説確立以前の陽明に即した理解か否か、その前期思想を考察する意義も含めて議論を深める必要がある。本間次彦「無は無いのか？」（『斯文』130）は、副題「李贄『老子解』第一章・第十六章注をどのように読むか」のとおり当該二章を分析する。その意図は、堀池信夫『中国イスラーム哲学—王岱輿研究』（人文書院2012）が当該老子注から李贄におけるイスラーム思想の影響を看取した点への批判に在り、読解の結果はその意図を支持する。本間次彦「『種』とは何か—王廷相・朱子・戴震」（『日中學會報』69）は、朱子学的理気論の批判者である王廷相の「種」理解をめぐる思想史的「系譜」を創出。その意図および論証過程を説得的に示すためには、紙幅が足りない。一方、大学紀要所掲の長編として新田元規「明末清初における于謙の評価問題」（『徳島大・人間社会文化研究』25）は、土木の変の收拾に功績のあった于謙に対し「社稷の臣」ではないとする清人侯方域の評価をめぐる同時代人の論評を詳細に分析。道義に傾斜したそれらの論調が当時の思潮を反映すると説き、それを脱却する方向性を帯びた毛奇齡の経義にも論及する。

以下は著者各自の大きな構想を支える個別の一篇。山田俊「夏元鼎思想研究之二—『黄帝陰符経講義』を中心に」（『古』）は、遼金両宋道教の思想世界を開拓する著者が、南宋の道士夏元鼎の鍊丹理論を分析した前篇を踏まえ、かれが『雪竇語録』を利用して禅者蒙庵を「脱空」と批判するも禅思想の理解においては当時一般の認識と同程度であったことを明かす。荒木龍太郎「潘平格の思想について—王心齋本末格物説との関連を通して」（『九州中国学会報』55）は、『大学』「物有本末」の「物」に依拠した本末格物説の系譜を追う著者の近作。朱王両学の主張とは異質な王心齋の本末格物説が、潘平格

によって「情」重視の、現実的実感的「人」に軸足を置く学説へと変容したと論じ、その志向性と明末の思潮との一致を見通す。かつて荒木見悟は「陽明学の発展にともなうて本来性より脱離しようとする情勢が高まってきた」と推測した。馬淵昌也「清初・張沐の「性」説とその背景」（『言語文化社会』15）は、明末清初期において本来聖人の発想が廃棄され、後天的善形成論に立つ人士が出現することを説く著者の張沐に関する専論。『遡流史学鈔』への丁寧な読解にもとづき、張沐が、立志－存養－窮理－力行というサイクルの繰り返しによる習熟として実践を捉え、仁義礼智の完成は後天的な拡充に抛る以上「修道」もまた「性」だと見たと述べる。

小島「展望」の第三、西学伝来にとまなう中国学術の変容が持つ世界史的意義について、新居洋子『イエズス会士と普遍の帝国－在華宣教師による文明の翻訳』（名大出版会）はその一端を明らかにした秀作。科学史家ニーダムが「言語学者にして歴史家、地理学者、人類学者、気象学者」とその多才ぶりを評価したフランス人イエズス会士アミオは、十八世紀後半の中国に滞在し膨大な量の報告書を本国に送っていた。そのなかから本書は、孔子の伝記、中国音楽、陰陽理論、乾隆帝の人物像と宮廷官僚観、タタール満洲語の解説書、朝貢国の諸情報、中国の歴史など各方面の文献を翻訳し、十七世紀以来のイエズス会士が培ってきた活動との比較、参照された原典の探索、ヨーロッパの思想動向やイエズス会自体の変化との関連性の分析といった研究を、対象に相応しい思想史的方法を駆使して展開する。

新居著が切り拓いた新たな成果は、清代思想史研究ひいては中国近世思想史研究の将来像を考える手がかりともなる。清代学術分野における従来型の個別研究として、程瑤田に対する評価とその実態との乖離を指摘し程氏の経学における「目驗」重視の姿勢を論じた尾崎順一郎「程瑤田の経学者としての評価とその手法」（『日中学会報』69）や、副題「清末民国期の経学に関する一考察」のとおり曹元弼の履歴と易学の書物三点の概要を述べ、それらの思想史的位置を考察する廖娟「曹元弼の『易』学三書」（『中国哲学研究』29）がある。そうした個別研究の重要性は言うまでもない。だが同時に、研究の域際性と学際性その双方への配慮も忘れてはならない。小島「展望」の第三点は、中国研究それ自体を豊かにするための提言としても受け取れるのであり、その豊かさが、日本を含む周辺諸地域の関連研究との有意義な対話を生み出すと思う（前世紀以来の言い古された話かも知れないが）。

②周辺諸地域（ベトナム・朝鮮・琉球）

佐藤トウイウエン『ベトナムにおける「二十四孝」の研究』（東方書店）は、十四世紀中国に成立し、周辺諸国にも伝播した二十四孝説話のベトナムにおける受容状況を解明した先駆的研究。伝承された説話が、三系統ある説話テキストのうち『日記故事』系統に属することを解明し、この説話と、近現代のベトナム社会においても重視される倫理道徳としての「孝」思想との関連性をめぐり、悉皆調査に抛る関連文献二十九種をもとに分析する。字喃文に翻案された文献を李文馥系とそれ以外とに区別して和訳した点は、著者独自の功績である。

川原秀城「豊穰な知の世界—退溪学成立前夜の朱子学をめぐって2」(『中国思想史研究』38)は、十六世紀朝鮮の儒者盧守愼の伝記を概観した前稿に次ぎその「人心道心弁」と「執中論」を分析、朱熹の「定論」に固執しない朱子学者盧守愼の非正統性を明らかにする。こうした分析の視角は姜智恩『朝鮮儒学史の再定位—十七世紀東アジアから考える』(東大出版会)にも共有される。氏は、十七世紀朝鮮に展開された朱子学への批判活動がその後の実学思想の登場を導いたという従来の学説に対し、その歴史性を繰り返し指摘する。つまりこの「通説」は、二十世紀植民地時代の韓国知識人が、朱子学対反朱子学ないし実学という図式を立て後者の「独創性」「実践性」を強調する過程において編み出されたものであった。本書はこの図式を乗り越えるべく、朴世堂や尹鑄の『大学』解釈について、実学思想の萌芽とか陽明学の知行合一的思考とみなされてきたその内容の朱熹『集註』との類縁性や、崔錫鼎『礼記類編』の朱子学的性格を論じる。文純実「『大義覚迷録』と朝鮮後期の知識人たち」(『朝鮮史研究会論文集』55)は、燕行使将来の『大義覚迷録』への関心が、原著の意図とは反対の呂留良への高い評価に由来するという逆説を述べる。

水上雅晴「琉球「科試」の実施状況について」(『沖繩文化研究』44)は、十八世紀後半以降の約百年間、琉球王国が実施した「科試」の科目や試験題目について、戦火を逃れて保存された経書注の書き入れなど零細な記録を集めて再現する。

五、日本漢学

日本漢学に関しては、中国の典籍や思想の受容・発展に関する研究を中心に論評する。

典籍の受容・解釈については、2014年に逝去した増尾伸一郎の遺稿集『道教と中国撰述仏典』(汲古書院)が、日本や朝鮮における宗教思想・文化史をその基層文化と外来思想との重層性のもとで捉える視点から、道教由来の多様な内容を有する中国撰述仏典に着目する。関連する多くの零細なテキストに対し独自の調査・翻刻・校勘をおこない、それらが日本古代の密教や陰陽道における各種の祭祀儀礼に取り込まれ、『日本霊異記』や『源氏物語』の内容とも関連することを明らかにするなか、仏教經典に対する道教の影響力を多面的に浮かび上がらせる。

野間文史「平賀中南『春秋稽古』初探」(『二松』31)は、平賀中南の生涯と著作とともに、『春秋稽古』の写本の特色とその構成を解説する。金原泰介「『左氏会箋』の校勘の特色とその位置—『左伝注疏校勘記』との比較を中心に」(『中国研究集刊』63)は、阮元『左伝校勘記』との比較や島田翰ら江戸期の校勘学者との学問的関連から『会箋』における旧鈔本重視の姿勢を確認する。

思想の受容・発展については、2015年に逝去した大島晃の遺作『日本漢学研究試論—林羅山の儒学』(汲古書院)が、そのIで林羅山の「道外無文、文外無道」説とその深化形態である「書は心の画なり」説について、経史子集にわたる羅山の幅広い読書の成果であることを具体的に述べる。IIでは羅山の学問観を体現する編著として南宋陳淳の『性理字義』に対する『諺解』を取り上げ、この評価の妥当性を立証するとともに羅山による朱子学理解の精確さにも触れ、『性理字義』諸版本との比較もおこなう。以上

は著者が提唱する「日本漢学」研究の成功した実践例であり、同書Ⅲは当該研究に関する目的や方法を述べた文章を収録し、Ⅳは漢学者評伝を載せる。

朱子学の音楽理論をまとめた南宋蔡元定の『律呂新書』は朝鮮・日本にも伝播した。榎木亨『日本近世期における楽律研究—『律呂新書』を中心として』（東方書店）は、『律呂新書』の全体構造を分析した上で、林家二代目当主の林鶯峰および一門の楽律研究、仁齋と同世代の中村惕齋による基礎的理論の構築から日本の雅楽に関する知識を利用した実践可能な古学復興への道筋、惕齋門下の齋藤信齋による師説普及の努力などを、刊本や写本への幅広い調査にもとづき解明する。五井蘭洲とその弟子中井履軒の「格物致知」や「知行並進」を考察する佐藤由隆は「懷徳堂学派の知行論」（『日中學會報』69）で「知行並進」の要素が朱熹の思想に内在し、羅欽順を通して懷徳堂学派さらには日本朱子学に影響を与えたことを見通す。藤居岳人「尾藤二洲の朱子学と懷徳堂の朱子学と」（『懷徳堂研究』8）は、尾藤二洲と懷徳堂の中井竹山・履軒らの朱子学の在り方を比較し、理に対する認識や実践面に関する見解の相違を指摘する。加藤国安「幕末の一儒の載道精神—伊予松山藩儒・大原観山旧蔵書考」（『日中學會報』69）は、正岡子規の祖父・大原観山の遺稿や旧蔵書を丹念に調査し、観山が「洋夷」に対する危機意識を載道主義的経世論として展開したことを述べる。

以下は近代にも考察が及ぶ成果。中村春作『思想史のなかの日本語—訓読・翻訳・国語』（勉誠出版）は、日本語とその形成を中国や西洋の文化との関わりの中で捉える。訓読についても、中国の古典を読解するための技法の面ではなく、思想史の考察対象として中国や西洋の文化を受容する際の「文化の翻訳」としての機能の面に着目し、訓読が近代日本の「知」を形成する契機たり得たことなどを指摘する。蔡毅「頼山陽『日本外史』の中国への流布」（『日本漢文学研究』12）は、『日本外史』が中国に輸出される過程や銭鐸評点本の成立事情、評点本に対する諸家の見解を紹介する。陶徳民『日本における近代中国学の始まり—漢学の革新と同時代文化交渉』（関大出版部）は、第一部では明治大正期における桐城派の文章論の影響、民国初期の文学革命に対する日本人の多様な認識、漢文直読に関する諸説と時代状況などを取り上げ、明治以後の日本における「漢学」の様相を描写する。第二部では銭泳による『海外新書』出版と藤澤東咳の関わり、宮島誠一郎・星野恒らの編纂物に対する王韜の評点、内藤湖南の章学誠研究と中国人研究者たちの反応など、編著を通しておこなわれた日中の学者間の交流を考察する。水野博太「明治後期における服部宇之吉の儒教理解について—Konfucius に見える「孔子教」論の萌芽」（『中国哲学研究』29）は、ドイツ留学時の服部の儒教理解が同時期の欧米人の孔子理解や日本の西洋哲学受容の在り方を踏まえることを指摘し、「辛亥革命と服部宇之吉における「孔子教」論の成立」（『東洋文化研究』19）では、帰国後の服部が「孔子教」論を理論化してゆく過程を描写する。